

書籍の紹介

『障害のある子の住まいと暮らし』 著者:渡部伸 出版社:主婦の友社

テーマその他

本の内容には、障がいのある人が現在選べる住まいの場について取り上げられています。(紀伊国屋作品情報より)

第1章 グループホームの登場(本人の重度化、高齢化に対応したグループホーム 神奈川県相模原市;通過型支援施設からグループホームなどへ移行 東京都杉並区 ほか)

第2章 障害はさまざまでも、支え合って暮らす(生活に少しサポートがあると暮らしやすくなる人向けのシェアハウス 東京都練馬区;高齢者と障害者がいっしょに暮らす共生型グループホーム ほか)

第3章 充実してきた支援を利用してひとりで地域に暮らす(脳性麻痺があっても福祉サービスを利用してひとり暮らし 東京都府中市;サテライト型というグループホームの新たな形 東京都八王子市 ほか)

第4章 「親なきあと」への準備—今できること(親が元気でサポートできるうちに、次のステップへ;将来、さらにケアが必要になった場合の住まいの選択肢 ほか)

今回紹介する「障害のある子の住まいと暮らし」(渡部伸著、主婦の友社発行)には、住まいのいろいろな形態が紹介されており、親が子どもの将来の住まいを考える時の参考になります。

本書では、「一人暮らしのためのサービス」や「親なきあとへの準備」について障害のあるお子さんを持つ筆者ならではのポイント、たとえば、きょうだいとの関係や地域とのネットワークなどもわかりやすく解説しています。また、近年整備が進められている“地域生活支援拠点”についての解説もあります。

この本には、具体的な施設として、共生型グループホーム“らぶあけぼの”(富山県小矢部市)が取り上げられています。年齢や障害の有無などにかかわらず、誰もが住み慣れた地域でデイサービスを受けられる「富山型デイサービス」は、私自身も以前より興味があったのでこちらの施設に訪問しました。

尾崎理事長の案内で施設を見学させていただき、また、開設からの苦労話などを伺うことで私のグループホームのイメージが一変しました。明るい雰囲気、職員の笑顔、そして利用している障害者・高齢者の生き生きとした表情。当施設を開設した穴田前理事長の「障害者と親がひとつ屋根の下で暮らす」という理念が実現できる共生型グループホームはすばらしいと感じました。

このように、この本から得た情報をもとに、自分自身でも足を運び見学することに繋がりました。障害のある方とかかわりを持たれる事業所の方にも参考になるので、是非お読みになってほしい1冊です。

最後に、役立つ情報紙としてもう一つ推奨したいのは「手をつなぐ」(全国手をつなぐ育成会連合会発行)です。こちらは、知的障害者本人や家族、支援者等の生の声を聞くことができるので参考にしたいかがでしょうか。